

明治学院歴史資料館

News Letter

No.13

2021

目次：

- 1 巻頭言 明治学院歴史資料館デジタルアーカイブズの公開
/ 長谷川 一 (歴史資料館館長、文学部芸術学科教授)
- 2-3 井深梶之助アルバム所収の写真について
/ 石崎 康子 (特任研究員)
- 4-5 明治学院の学生ストライキ事件
—山田幸三記『明治二十九年日誌』より—
/ 松本 智子 (特任研究員)
- 6 井深梶之助夫妻記念碑建立、井深梶之助関係小冊子の発行について
/ 小暮 修也 (明治学院学院長)
- 7 2021 年度博物館実習 / 亀元 円 (学芸員)
- 8 2021 年度主な活動、その他

巻頭言

明治学院歴史資料館デジタルアーカイブズの公開

長谷川 一 (歴史資料館館長、文学部芸術学科教授)

わたしたち明治学院歴史資料館では、2022年1月24日より、「明治学院歴史資料館デジタルアーカイブズ」を公開、運用を開始しました(当館ウェブサイト <https://shiryokan.meijigakuin.jp/> からバナーをクリック)。

このデジタルアーカイブズは、当館が所蔵する資料群の一部をデジタル化して提供し、ウェブサイト上で検索・閲覧を可能にするサービスです。インターネット環境さえあれば、だれでも、いつでも、どこからでも、利用することができます。所蔵目録やデジタル資料を学院内外のみなさまに活用していただくことはもちろん、本学の価値をひろく社会と共有するための一助となることも期待されます。

デジタルアーカイブの先駆的な事例のひとつに、アメリカ議会図書館のナショナル・デジタル・ライブラリー・プログラムが挙げられます(<https://memory.loc.gov/ammem/dli2/html/lcndlp.html>)。このプロジェクトの開始は1994年、まだインターネットの商用利用がはじまってまもない草創期といってよい頃のことでした。四半世紀をへて、こんにちでは大学や図書館、ミュージアムなどの研究・教育機関のみならず、文書館から自治体、企業、NPOにいたるまで、さまざまな組織が多様なデジタルアーカイブを公開しています。その長いリストの最後列に、このたび当館もくわえていただくことができました。

これを契機として、当館は「知をわかちあう館」をコンセプトにかかげてゆきたいと考えています。デジタルアーカイブズの公開は、たんなる情報提供の一手段というにとどまらず、当館のあり方そのものを再定義するものでもあるからです。展示や講演会、学習支援などをつうじ、利用者・来館者のみなさまと、たがいに知をわかちあい、学びあい、ともにあらたな社会を創りあげてゆく——。そのための場として機能することを、当館はめざしてゆく所存です。

そうであるのなら、デジタルアーカイブズ公開は、まだその一步にすぎません。研究・教育面でデジタルアーカイブズをおおいに活用していただく一方、このサービスを核に関係諸機関と連携をはかり、さまざまな仕方で情報発信機能を充実させてゆきたいと考えています。そしてそうした諸活動が、当館の根幹をなす活動——本学の歴史的資料の蓄積、整理、保存、活用——へとフィードバックされ、過去と未来を媒介する確かな礎となることを夢んでいます。

これからもみなさまの温かなご支援をたまわりますよう、よろしく願い申し上げます。



明治学院歴史資料館デジタルアーカイブズトップ画面

井深梶之助アルバム所収の写真について

石崎 康子 (特任研究員)

当館は、今年度データベース公開のため写真資料の再整理を行った。ここでは整理・公開された写真のなかから1枚を取り上げたい。

当館には、井深梶之助の手元に集まった写真をアルバムに仕立てた「井深アルバム」と呼ばれる資料が5冊ある。中に朱墨で写真右側に「明治三年於横浜撮影、左本多庸一、右押川方義、二少年ハ本多氏ノ藩主津軽候ノ二息、長ヲ津軽金太郎君、少ヲ八十五郎君ト称セリトゾ、此写真ハ東北学院長ドクトル シュネーダ所蔵也」と記された1枚の写真【写真1】が収録されている。朱書きによると、この写真は明治3(1870)年に横浜で撮影され、写真に写るのは弘前で東奥義塾の創設に関わり、後に青山学院の第2代院長となった本多庸一(1849～1912)と、東北学院の初代院長となった押川方義(1850～1928)、さらに「藩主津軽候ノ二息」の津軽金太郎と津軽八十五郎であるという。ここでは写真の撮影時期と、写真に写る津軽姓の少年について考えてみたい。

なお朱書きの書き手であるが、朱書きには椅子に座る左の人物が本多、右の人物が押川と記されている。しかし左が押川、右が本多である。井深は、明治初頭、横浜で本多・押川と共に修文館に通っており、横浜バンドの朋友の名を間違えるとは思われないことから、朱書きは井深によるものではないと考えたい。



【写真1】横浜で撮影された本多・押川らの写真

左の人物が押川方義、右から2人目が本多庸一、立位の2少年が津軽姓の少年。ID: 2202190001-072、整理番号: Ph-A001-019-01

1. 津軽姓の少年について

写真右側に記された朱墨の記載には、写真が東北学院第2代院長のシュネーダから贈られたもので、写真に写る二人の少年は、立位の背の高い少年が津軽金太郎、右の立位の少年が津軽八十五郎であると記されている。

津軽承昭(1840～1916)は、弘前藩第12代藩主で、弘前藩最後の藩主である。その業績をまとめた『津軽承昭公伝』(津軽承昭公伝刊行会編 1917年)の明治5年の項に、「二月三日、公、時勢ヲ察シ、英学ノ必要ナルヲ認メラレ、一門ノ少壮者ヲ選ミテ、就学セシメントシ、即チ津軽金太郎・津軽熊一・津軽八十五郎ヲ召喚シ、横浜ニ於テ其学ニ就カシム」とある。津軽金太郎・同熊一・同八十五郎の3人は、明治5年2月に選抜され横浜に赴くこととなったことが分かる⁽¹⁾。

「津軽家一門并六家系譜」⁽²⁾(以下、「系譜」)によれば、津軽金太郎は、弘前藩第3代藩主信義の6子伊左衛門信経が起こした分家の8代模久の子で9代、幼名を金太郎と称した津軽模正であろう。金太郎は、万延元年7月28日(1860年9月13日)に生まれ、文久元(1861)年に家督を相続し、文久2年には使番格500石取となったが、明治に入り藩政改革により減封となり、明治3年には百俵取りで、清野袋村(現在の青森県弘前市清野袋)に田地と屋敷地を与えられている。金太郎は、明治5年横浜に赴いた時、満11歳であった。

津軽八十五郎は、「系譜」によれば、弘前藩第3代藩主信義の13子大蔵為貞が起こした分家の第6代の八十五郎であろう。八十五郎は、文久元年6月20日(1861年7月21日)生まれで、横浜に赴いた時は満10歳であった。八十五郎については、『青森県人名大事典』(東奥日報社編刊、1969年)に記載があり、その経歴を知ることができる。

金太郎・八十五郎とともに横浜に送られた熊一については、「系譜」に伊左衛門信経家の6代範之の子8代模久の弟で、金太郎の叔父にあたる「熊市」がいるが、同一人物であるかどうかは不明であり、熊一の経歴も不詳である。

2. 横浜での生活

「一門の小壮者」から3名の少年が選抜されたのは明治5年2月であったが、その約2年前の明治3年4月、

本多庸一は弘前藩の命令で、8名の青年と共に洋学修行のため横浜に向かった。この留学は、藩からの帰国命令により明治4年暮れに中断し、本多は弘前に戻ることとなった。そして帰国間もない明治5年2月、本多は、旧藩主の命により横浜へ遊学することになった3人の少年らとともに、再び横浜へ向かうこととなった。横浜での様子は、本多が死去した明治45年に弘前藩出身の手塚新⁽³⁾が記した追悼文(『護教』1083号、1912年5月3日号)に次のようにある。「明治五年春余は上京したが、間もなく眼疾に罹ったので、治療のため、横浜に行ったが、此時本多氏は、同地にあり己に自分の勉強の傍ら藩主の一門なる三公子を監督しておった」。しかし明治7年11月から12月にかけて、本多は東奥義塾の教員として弘前に向かうイング一家に同行し、再び弘前へ向かうこととなった。その際、3人の少年が本多に帯同したかどうかは不明である。

3. 写真について

上記のことから、撮影時期については、本多が3人の少年と横浜で暮らしていた明治5年2月から明治7年暮れまでの時期に撮影されたものであり、朱書きにある「明治三年於横浜撮影」は間違いであることが分かる。また「系譜」から、写真に写る二人の少年は、津軽家一門ではあっても、「藩主津軽候ノ二息」ではないこともわかる。

なおこの写真とほぼ同じ大きさの写真が、昭和7(1932)年11月、東北学院のシュネーダより、東奥義塾の笹森順造塾長に宛て、書簡⁽⁴⁾を添えて送付されている。また青山学院資料センターも、旧所蔵者は不明ながら、「シュネーダ博士寄贈」と注記されたほぼ同じ大きさの写真を所蔵されている⁽⁵⁾。シュネーダは、少なくとも、井深、青山学院関係者、東奥義塾へ、「小さな写真を拡大した(複写)写真」を送付したと考えられる。

シュネーダが東奥義塾の笹森順造に複製の写真を送った昭和7年、すでに本多も押川も亡く、横浜バンドの人々の訃報も度々であった。しかし横浜バンドにより創設されたキリスト教主義学校は各地に根を張り、本多庸一が第2代院長を務めた青山学院も、この年創立50周年を迎えた。ここで取り上げた複写写真は、横浜バンドの実りと、バンドの終焉の時期にあたり、回顧の念を込めてシュネーダより本多ゆかりの人々に送られたものであろう。

なお青山学院資料センターには、【写真1】とは異なる横浜時代の本多・押川らを写した写真⁽⁶⁾を所蔵されており、写真に写る人たちの名前が記されているが、そこには【写真1】の朱書きで津軽八十五郎と記された少年の名を津軽金太郎としている。またシュネーダが写真に添えて笹森宛てに送った書簡には、平田⁽⁷⁾の言により中央の立位の少年は「黒石」であると記している。写真に写る2少年の名前を特定することは、後日の課題としたい。

本稿の執筆にあたっては、青山学院資料センター、東奥義塾図書館、東北学院史資料センターにお世話になった。また弘前市立図書館には多大なご協力を得た。記して謝意を表したい。なお紙面の関係で、調査の過程で判明した様々なことを記すことができなかった。稿を改め記したいと思う。

- (1) 保村和良「幕末から明治初期の国内留学事情—洋学修行を志した津軽のサムライたち—」(『東北女子大学・東北女子短期大学紀要』No.53、2014年)参照。
- (2) 「津軽家一門并六家系譜」(YK288-15)、弘前市立図書館所蔵、八木橋文庫所収。
- (3) 手塚新(1855—1936)は、陸奥国鱒ヶ沢(現青森県鱒ヶ沢町)に生まれ、弘前に移る。医学を学ぶために横浜に遊学し、横浜で本多を通してキリスト教を知り、バラより受洗、牧師として活動した。
- (4) 東北学院史資料センターよりご教示いただいた下記の資料による。

Nov. 14, '32

Dear Pres. Sasamori,

I herewith send you an enlargement of a little photograph that was taken in Meiji 4, showing Mr. Oshikawa and Mr. Honda, sitting and two young men whom Mr. Honda probably brought with him from Hirosaki. And old friend, Mr. Hirata of Yokohama, thinks their names are Thugaru (in the middle) and Kuroishi. It was at the time when they were in the Shubunkwan, a government school in which Dr. S. R. Brown taught a little while. I shall be glad if you will keep the picture in Toogijuku.

Yours fraternally

D. B. Schneder

- (5) 「明治五年頃写真」(青山学院資料センター所蔵 AA146-H1-5-2A)
- (6) 「明治3、4年頃 横浜時代写真」(青山学院資料センター所蔵 AA146 H1-11-21-1)は、木村繁四郎が原版を所有した本多庸一など旧弘前藩関係者5名が写る写真であるが、そこでは【写真1】の右端に写る少年の名を津軽金太郎と記している。
- (7) 平田は、東奥義塾出身の平田平三(1860—1933)のことと思われる。

明治学院の学生ストライキ事件

—山田幸三記『明治二十九年日誌』より—

松本 智子（特任研究員）

明治学院歴史資料館では、1893（明治26）年9月から1897（同30）年3月まで明治学院神学部^{（註1）}に在籍していた山田幸三の日記（以下、「山田日記」とする）を翻刻し、これまで『明治学院歴史資料館資料集』第16集・第17集として刊行した。最後の翻刻となる2022年3月刊行の第18集には、1896年から幸三が学院を卒業する1897年3月までの『明治二十九年・同三十年日誌』を収めている。

ここでは、その第18集の内容から、特に『明治二十九年日誌』に見える学生の「ストライキ事件」を取り上げて「山田日記」の紹介としたい。

なお、明治学院第二代総理の井深梶之助が書いた日記^{（註2）}（以下、「井深日記」とする）を適宜参照しながら、当時の学生や教員たちの様子を捉えてみたいと思う。

事件は1896年10月21日に起きた。「山田日記」には3日にわたり、次のように記されている（読点・中黒および傍記は筆者が付した）。

●「山田日記」10月21日

普通学部の連中、賄^{（周施）}に対し「ストライキ」をやらかし、食器を半ば破砕し、加ふるに僕婢かね女^{（加治木）}をして失神せしめ、一時は大騒ぎを演じたる由、井深氏来り加字木氏立合ふ

●「山田日記」10月22日

昨夜の「ストライキ」事件よりして我々も差当りの朝飯に困りしも、幹事の周施^{（周施）}により都寿司を配附され漸く間に合ひき、ストライキの首領三人停学さる

●「日記」10月23日

ストライキ首領と認めしはランプを消したる南・富沢・森田の三人

普通学部の学生たちが寄宿舍で食事を給仕する^{（まかない）}賄^{（周施）}に対してストライキを起こした。食器を壊したり、「かね」という使用人を失神させたりして大騒ぎとなり、井深や医師の加治木が駆けつけている。ここでいう寄宿舍とは、当時普通学部生が入っていたヘボン館のこと。幸三は、当年3月25日まではヘボン館にいたが、26日に神学部生の寄宿舍であるハリス館に移っており^{（註3）}、事件のあった10月21日は現場に居合わせたわけではない。「ストライキ」の内容は伝聞である。

ただし、当時、寄宿舍の食堂は一ヶ所だったらしく^{（註4）}、ハリス館に寄宿していた幸三たち神学部生も、翌日はこのストライキの余波で食堂での朝食にありつけず、幹事によって準備された「都寿司」を食している。

「山田日記」には、首領3人が停学処分をうけたことと、その3人は南（廉平）・富沢（清齋）・森田（金之助）であったことが記されて以降、このストライキについては触れられていない。が、実際のところ、学院内では数日間このストライキの影響がみられ、10月24日には3人の停学処分が解かれている。こうした経緯を「井深日記」で確認してみたい。

●「井深日記」10月21日

普通学部寄宿生等一同、夕食ノ後、食堂ニ於テランプ吹消シ、之ヲ合図ニ食卓ヲ倒シ膳椀ヲ破壊シ乱暴ヲ為シタリ

●「井深日記」10月22日

礼拝後臨時教授会ヲ開キ昨夕ノ出来事ヲ議ス、余・熊野・ワイコフノ三人取調委員トナリ、南・森田・富沢・里見・末松等ヲ呼出シテ質問ノ末、森田先ヅランプヲ下ケ南ト富沢之ヲ吹消シ之ト同時ニ乱暴ヲ為シタルコトヲ突止タリ、依テ教授会ニ於テ評議ノ末、右三人ニ無期停学ヲ命ジ其他ノ生徒ニハ訓戒ヲ加フルコトニ決シ、午後一時半彼等ヲ講堂ニ呼出シテ之ヲ宣告ス、夕刻寄宿生二十六名ヨリ書面ヲ出シテ再議ヲ求ム、評議ノ上判決ヲ変更スベキ理由ヲ発見セザル旨ヲ答フ

幸三の日記より詳細である。場所は食堂、時は夕食時、暴動開始の合図はランプの吹き消しであったという。22日には、臨時教授会が開かれ、井深・熊野雄七・ワイコフが取調委員となった。生徒数人を呼び出し、諸々聞き出した結果を教授会で評議の末、南・富沢・森田の3人が無期停学、その他の生徒は訓戒処分となった。夕方には寄宿生26名が書面で再議を求めてきたが、処分内容は覆らなかった。そのため、23日の授業では「処分ヲ受タル生徒ハ不服ヲ唱ヘテ尚出席セズ」という状態であった。

●「井深日記」10月24日

午前保証人等ヲ召喚シテ各生徒ヲ訓戒セシム、植村・藤田・石原・小倉ノ四氏、教授会ニ向テハ処分ノ再議ヲ請ヒ、生徒ニハ向ヒテハ説諭ヲ加ヘテ其非ヲ謝シ且ツ将来

ヲ慎ムベキコトヲ約束セシメテ其旨ヲ教授会ニ通ジタリ、依テ教授会ハ三人ノ無期停学ヲ解クコトヲ議決シ、生徒一同ヲ講堂ニ集メ教授会並ニ右ノ四氏立会ノ上、之ヲ宣告シテ此事ノ局ヲ結ブ

24日に各学生の保証人が呼び出され、学生たちは訓戒を受けた。一方で、神学部教授の植村正久、図画講師の藤田文蔵、牧師の石原保太郎、神学部講師の小倉鋭喜ら4人が学生たちの処分について教授会に再議を求め、その結果3人の無期停学が解かれた。教授会は学生一同を講堂に集め、再議を求めた教員4人立ち会いのもと、3人の無期停学の解除を宣告することをもって終結とした。

とはいうものの、「井深日記」10月26日条に「生徒等本日ヨリ大抵出席シタレトモ五六名欠席セルモノアリ、暴風後ノ余波未タ全ク治ラザルガ如シ」と記されており、学生の中には抵抗を続ける者もいたようである。

井深は続けて、このストライキ事件についての心中を次のように記している。

今回ノ出来事ニ付最モ我ガ心ヲ痛マシムル所ノモノハ、彼等ガ乱暴シタルコトニハ非ズシテ彼等ガ之ヲ蔽ハントシテ男児シク其責ヲ引カザリシコトナリ

明治学院の寄宿舎で起きた賄への反発は、この時に突然始まったわけではなかった。前年の「山田日記」にもその兆しが見受けられる。

1895年10月4日条には「賄交換の議。有志者奔走す。自分も大賛成」、10月16日条には「今日より賄の飯を食わず」とある。11月1日条では賄が交代し、新しい賄が着任した。12月31日条には「自分去る二十二日より賄の飯を食はざりしか今日より始む」とあり、新しい賄に対する不満の表れか、幸三は暫く賄の出す食事を食べていない。

翌1896年3月14日条には、「今までの賄清水は今日限にて去られ、明日よりはくぼなるもの来る由」とあり、それまでの「清水」から「くぼ」という名の賄に交代。更に、7月4日条には「学院賄今日限りにて罷む」とあることから「くぼ」という賄も辞めており、前年から冒頭に掲げた10月21日のストライキ事件が起きるまでに、すでに3人の賄が交代していたのである。

そもそも、学生たちの不満の原因は何であったのか。幸三も井深もその点には触れていないが、他の学校でも以前から「賄征伐」と呼ばれる食堂の賄人に対する学生の乱暴が少なからず見られ、これらの騒動は、「約束通り旨い物を喰はせないから」(註5)、「食物の質と量がわるくなっている」(註6)など、出された食事への不満によるものが多い。首領3人のうち森田と富沢は学院のベースボールチームに所属しており、食欲もほかの者より旺盛

であったであろう。

賄に支払う賄費(食費)も学生の懐を圧迫していたのではないだろうか。幸三の日記から確認できる賄費は1ヵ月3円前後である(註7)。ちなみに、明治期の寄宿舎における1ヵ月の賄費は、1879年の司法省法学校で4円50銭(註8)、1885年の東洋英和学校で2円75銭(註9)、1891年の彦根中学で1ヵ月3円(註10)であったというから、幸三の支払った賄費も法外な金額ではなさそうである。しかし、幸三は毎月ミッションから受け取る貸費5円から直ちに賄への支払いを済ませており、貸費の半分以上が常に賄費に消えていた。学生の身としては大きな出費である。にもかかわらず満足いく食事が提供されなければ、当然不満もつのである。前掲の日記の中で、幸三自身も「賄交換の議」に「大賛成」と記している。冒頭のストライキを起こした学生たちもまた少なからず幸三と同じような状況であったと思われる。

ところで、ストライキの首領3人はその後どうなったか。富沢は学院を中退、のちの詳細は不明であるが、晩年には多摩村で村会議員を務めている。森田と南は普通学部を卒業後、オーバン神学校などに留学し、牧師となった(註11)。

(註1) 山武市歴史民俗資料館所蔵 東京都八王子市 山田家文書。

(註2) 当館所蔵「明治二十九年 当用日記」。

(註3) 『明治学院歴史資料館資料集』第18集、50頁参照。

(註4) 1902(明治35)年に明治学院高等学部に入学生、寄宿舎で過ごした都留仙次は『明治学院生活』(佐々木邦編、現代思潮社、1953年)の中で「食堂はもとヘボン館地下室にあったそうであるが、われわれの時代にはハリス館内にあった」と記しているように、当時隣接して建っていた両館は食堂を一ヶ所に定め共有していた。1891年に普通学部を卒業した島崎藤村もその著書『桜の実の熟する時』の中で、「食堂につづいた一棟の建物の中に別に寄宿する神学生なども〔後略〕」と書いている。

(註5) 福沢桃介「賄征伐を為して福沢先生に叱らる」(『桃介は斯くの如し』、星文館、1913年 所収)。

(註6) 村松梢風「賄征伐」(『梢風名勝負物語』[第3] (原敬血闘史黄金街の覇者))、読売新聞社、1961年 所収)。

(註7) 幸三の日記で確認できる賄費は次の通り。2円53銭(支払日、以下同、1893年10月25日)、54銭(1894年1月20日)、3円8銭(同2月20日)、3円5銭(同3月22日)、2円91銭(同4月20日)、3円7銭(同5月19日)、3円39銭(同6月17日)。

(註8) 註6に同じ。

(註9) 『読売新聞』1885年9月4日朝刊、生徒募集広告。

(註10) 野村治一良「賄征伐のストライキ彦根中学時代の思い出」(『米寿閑話：言論の自由と「二十六世紀」事件』、1963年)。

(註11) 3人の経歴については『明治学院歴史資料館資料集』第18集の各註参照。

井深梶之助夫妻記念碑建立、井深梶之助関係小冊子の発行について

小暮 修也（明治学院学院長）

2019年夏、旧知である木村良己・元同志社中学高等学校長と伊藤三千子氏が学院長室を訪ねて来られた。聞けば、お二人とも井深梶之助・明治学院第二代総理（学院長）の曾孫で、特に伊藤氏は青山霊園にある井深家墓地の管理者とのことである。近いうちに井深家の墓地を整理したいが、明治学院で管理を引き継いでもらえれば、なおありがたいとのことであった。そこで、井深家の墓地を明治学院で管理承継する点について弁護士を通じて東京都に相談した。その結果、東京都霊園条例第19条により、個人の墓地を法人に承継することはできないとのことであった。



写真1 瑞聖寺内明治学院宣教師墓所に建立された「井深梶之助ご夫妻の記念碑」

やむを得ず、青山霊園の墓地管理承継を諦め、かわりに白金台・瑞聖寺内にある明治学院宣教師の墓所に井深梶之助ご夫妻の記念碑建立を瑞聖寺に申し出た。すると、古市住職は快諾してくださった。墓地の移動は難しく記念碑としたが、青山霊園の墓地を承継する意味で、その地の土を少し取りこの記念碑の下に入れ、碑の形もバラ夫妻の墓石の形を踏襲した。ここに葬られた宣教師は井深梶之助と同時代に働かれた方々であり、相応しい場所に落ち着いたと思う。

ところで、井深梶之助は15歳の時に会津戊辰戦争で会津若松城（鶴ヶ城）籠城戦を戦ったが、その同じ場所に8歳上で鉄砲を担ぎ新政府軍と戦った山本八重がいる。この女性は後に新島襄の伴侶となった人である。また、日本近代経済の発展に力を尽くした渋沢栄一に

日曜学校世界大会の講演を依頼しこれを実現するとともに、この大会の後援会についても話し合っている。さらに、井深は明治学院白金台校地内の総理邸に20年余り住み、渋沢栄一の従兄である渋沢喜作邸（現、白金台・八芳園）とも近かった。渋沢栄一は新島襄が同志社を設立する際に多額の寄付をしていることを考慮すると、井深梶之助、新島（山本）八重、新島襄、そして渋沢栄一と繋がって親しく交流していたと推測する。自らの動向を記した「井深梶之助日記」を翻刻し調べてみると、さらに多くの人間関係が浮かび上がってくるのではないかと推測する。

これまで井深梶之助はあまり知られず、多くの人に知ってもらいたいと願い、伊藤三千子氏寄贈井深家関係資料の一部と共に『心清き者は福なり－明治学院と井深梶之助－』（2021年10月）という小冊子を編み発行した（明治学院大学 Web サイトで閲覧可能）。その後、この小冊子が井深梶之助の郷里で発行されている『福島民報』（2021年12月19日付）文化欄に取り上げられ、「キリスト教教育の先駆者 会津出身 井深梶之助」として紹介された。

尚、伊藤三千子氏寄贈井深家関係資料は、貴重なコレクションとして保存され、その目録は、明治学院歴史資料館のデジタルアーカイブズでアクセスできるので、ぜひ多くの方々に利用していただきたい。

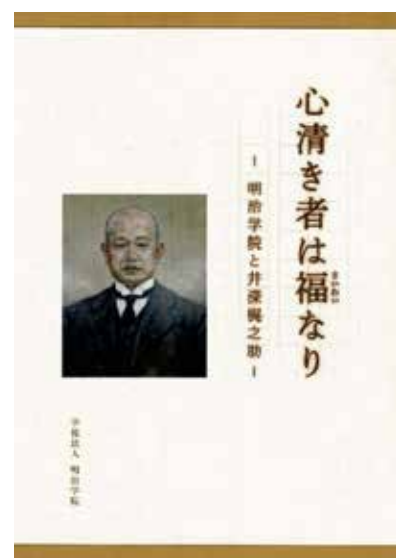


写真2 『心清き者は福なり－明治学院と井深梶之助－』（学校法人明治学院発行）

2021 年度博物館実習

亀元 円（学芸員）

明治学院歴史資料館では新型コロナウイルスの感染予防対策をおこない、2021年9月6日（月）から9月10日（金）まで博物館実習を実施しました。5日間の実習では、明治学院の歴史や建造物、明治学院第二代総理井深梶之助について学ぶために歴史資料館が所蔵している資料の内容を中心にカリキュラムを組みました。また、実習生はその成果報告として、明治学院の歴史的建造物3棟（チャペル（礼拝堂）、インブリー館、記念館）について展示をおこないました。実習中の写真と共に、カリキュラムを抜粋しご紹介いたします。

9月6日（月）

明治学院の歴史や、明治学院第二代総理井深梶之助について学び、歴史的建造物3棟と歴史資料館展示室の見学をしました。午後は「離別一札之事」など、江戸時代の古文書の複製を用いて、古文書の読みや当時の時代背景を考えました。また資料目録の作成など、古文書の整理について学びました。



9月7日（火）

午前中は和本の取り扱いや桐箱、卷子、掛け軸の取り扱いについて学びました。現在、歴史資料館展示室にて開催している都留仙次展（ガラス乾板関連展示）でも展示している葉書資料を実際に使用し、内容を解読しました。午後は、都留仙次のご子息であり資料寄贈者でもある、都留和夫氏にご来館いただき、思い出話などを交えて都留仙次について貴重なお話を伺いました。

9月8日（水）

歴史資料館で使用している資料調査用紙を用いて、実際に資料の調査をおこなった後、歴史資料館がどのような資料の保存をしているかを学びました。



9月9日（木）

各自、調査とまとめをおこないました。展示にむけて意見を出し、展示のタイトルなどを決めました。また、展示に使用するキャプションをパネルで作成しました。

9月10日（金）

展示するパネルを設置し、展示ケース内の最終調整をしました。また、「Working Heritage - 愛され続ける歴史的建造物3棟 -」の成果報告と振り返りをおこないました。



実習生3名は、明治学院の歴史に興味を持ち、それぞれの感性でとても興味深い展示を完成させました。5日間という限られた時間の中で、創意工夫をし、展示を作りあげた実習生たちに私も多くのことを学びました。

※現在、展示室は明治学院の学生・生徒を対象に限定開館をしています。

明治学院歴史資料館デジタルアーカイブズの公開

明治学院歴史資料館では、2022年1月24日（月）より、歴史資料館と学院の諸学校が所蔵する学院の歴史資料を、デジタルアーカイブズとして公開しました。任意の言葉による検索が可能な目録検索に加えて、明治学院にゆかりの深い人物や歴史的建造物、明治学院歴史資料館コレクションなど所蔵する資料を多面的に紹介しています。また、同アーカイブズに掲載している利用規定を遵守すれば、画像等デジタルコンテンツをダウンロードして二次利用していただくことも可能です。（当館ウェブサイト <https://shiryokan.meijigakuin.jp/> にアクセスするか、右記のQRコードを読み取りデジタルアーカイブズのバナーをクリックしてください。）



明治学院歴史資料館
ウェブサイトQRコード

資料の受贈

- 山田幸信氏 山田幸三肖像写真 他 10点
- 藤村正巳氏 井深梶之助筆掛軸 3点
- 佐倉瑞穂氏 佐々木邦先生から丸尾彰三郎へのはがき 1点
- 岩谷英昭氏 ミルトン第一長老教会写真 他 7点
- 都留和夫氏 都留仙次関係写真資料 3点

講演会・教育支援等

- 9月6日（月）～10日（金） 2021年度博物館実習 実習生 3名
- 11月11日（木） 三河内彰子先生「視聴覚メディア論B」展示室見学・歴史的建造物3棟の見学 20名
- 11月25日（木） 辻直人先生「明治学院研究2」展示室見学・歴史的建造物3棟の見学 15名

購入資料 合計7点

- ・和田英作画「鳩」（1点）
- ・『新約聖書路加伝』等明治元訳聖書（8冊）
- ・賀川豊彦署名・献辞入写真（2枚）
- ・『東京市芝区地籍図』（1冊）、『東京市芝区地籍台帳 昭和9年7月末現在』（1冊）
- ・『日本基督教会憲法並細則附録』（1冊）
- ・島崎藤村自筆書簡 明治24年4月20日付（1通）
- ・*Sketch of the south Japan mission of the reformed church in America.*（1冊）

明治学院歴史資料館刊行物のお知らせ

『明治学院歴史資料館資料集』第18集

2022年3月刊行

山田幸三記「明治二十九年・同三十年日誌」

本書は、第16集・第17集に引き続き、1893（明治26）年から約4年間、明治学院神学部にて在籍した山田幸三（1873-1940）の日記を翻刻し、解題を付したものです。本書に収める1896-1897年は、幸三が最終学年を過し、卒業を迎える時期にあたります。当時の明治学院での出来事をはじめ、勝海舟の三男梶梅太郎・その妻クララとの交流や津田梅子宅への訪問、天然痘の流行や各地で相次いだ天災の記録など、多くの貴重な内容が含まれています。幅広い分野でご活用いただけると幸いです。

2021年度 歴史資料館委員・スタッフ

- 委員長 長谷川一 歴史資料館長（文学部教授）
- 委員 戸谷浩 図書館長（国際学部教授）
- 笹田直人 大学教員（文学部教授）
- モリー・ヴァラー 大学教員（法学部専任講師）
- 植木献 大学教員（教養教育センター准教授）
- 櫛田健一 法人職員（法人事務局長）
- 鈴木直子 大学職員（図書館次長）
- 岡村淑美 高等学校教職員（高等学校教諭）
- 青野由美 中学校・東村山高等学校教職員（東村山高等学校教諭）

歴史資料館

- 協力研究員 辻直人 木村一
- 特任研究員 石崎康子 松本智子
- 学芸員 亀元円
- 事務局 三上耕一 安藤正明 小杉義信

明治学院歴史資料館 News Letter No.13
発行者 明治学院歴史資料館
発行日 2022年3月31日
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
電話：03-5421-5170
E-mail:shiryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp
<https://shiryokan.meijigakuin.jp/>